

「幻の鉄道」が「お宝」として地域をつなぐ

和田 浩

1. はじめに

平成 26 年 2 月 9 日、「今福線研究分科会」待望の「今福線マップ」を島根県技術士会ホームページに掲載しました。

本年度で 5 年目を迎える「今福線研究分科会」の活動は、平成 26 年 2 月 13 日に「今福線マップ」作成の報告と本研究分科会の活動内容や遺構の維持管理、保存・活用方法について PR することを目的として、久保田章市浜田市長を訪問したことがきっかけに、浜田市をはじめ今福線沿線の地域の方々等、今福線に関わる皆さんを巻き込み大きく動き始めました。

「幻で終わった鉄道」が今まさに、人と人、地域と地域を繋ぐ「お宝」として蘇ろうとしています。

今年度の活動内容と来年度以降の活動状況について報告します。

2. 平成 26 年の活動経緯

平成 26 年の活動経緯は表 2.1～2.2 の通りである。

表 2.1 平成 26 年の活動経緯表 (1/2)

年月日	活動内容	備考
2月9日	「今福線マップ」を島根県技術士会ホームページに掲載	
2月13日	浜田市長を訪問 ・「今福線マップ」の作成報告と今福線研究分科会の活動の PR ・浜田市長より、「観光スポット」と「シンポジウム」開催を提案される	参加人数 6名 佐藤、嘉藤、村上、渡辺 盆子原、和田
2月21日	浜田市観光振興課と「観光スポット」と「シンポジウム」開催について打合せ	参加人数 2名 盆子原、和田
2月22日	石本さんへ「観光スポット」と「シンポジウム」開催について協力依頼と打合せ	参加人数 3名 大畑、木村、和田
3月28日	「観光スポット」を浜田市へ提案 観光ルート化として今福線の見所となる遺構（当面5箇所）を抽出し提案	参加人数 1名 和田
4月11日	浜田市観光交流課と「シンポジウム」の開催日と浜田市関連部署（観光交流課・財産管理課・維持管理課・金城支所）との「合同現地見学会」の開催について打合せ	参加人数 2名 盆子原、和田
4月21日	島根県技術士会ホームページに掲載の「今福線マップ」に桜街道を追加	
4月27日	「合同現地見学会」の開催 ・「シンポジウム」に向けて、「今福線マップ」に沿って、下府駅～今福橋梁までの全線に関係者（島根県立大学；西藤先生、浜田市；観光交流課・財産管理課・維持管理課・金城支所、今福線研究分科会）で現地見学 ・遺構の状況や課題について関係者が共通認識として確認	参加人数 7名 嘉藤、村上、渡辺、盆子原 大畑、服部、和田
5月8日	浜田市観光交流課と「合同現地見学会」の調査結果とその整理、「シンポジウム開催に向けた関係者による全体会議」の打合せ	参加人数 3名 嘉藤、盆子原、和田

表 2.2 平成 26 年の活動経緯表 (2/2)

年月日	活動内容	備考
6月11日	石本さんへ「全体会議」立ち上げの経緯と関係自治会への協力依頼について打合せ	参加人数 2名 大畑、和田
6月21日	「中国地方地域づくり等助成事業報告会」への出席 助成金を活用した「今福線マップ」の作成報告と今福線研究分科会の活動報告を発表	参加人数 2名 嘉藤、和田
7月12日	「今福線研究分科会」合同会議の開催 H26年度の今福線研究分科会の具体的な活動内容と現地調査日程等について打合せ	参加人数 9名 嘉藤、河野、桑野、佐々木 小村、伊藤、渡辺、大畑 和田
7月29日	「全体会議」の開催 浜田市（観光交流課、財産管理課、維持管理課、金城支所）、今福線沿線自治会、島根県立大学、今福線研究分科会の関係機関への「シンポジウム」の開催意義と協力依頼	参加人数 8名 村上、桑野、永田、大畑 渡辺、服部、盆子原 和田
8月26日	「合同現地見学会」を開催 「観光スポット」の整備に向けた工事や予算請求のため関係者（浜田市；観光交流課・財産管理課・維持管理課・金城支所、島根県立大学、森林組合、今福線研究分科会）での現地視察	参加人数 7名 嘉藤、村上、大畑、渡辺 服部、盆子原、和田
9月30日	「第1回実行委員会」の開催 「広浜鉄道今福線を活かすシンポジウム」に向けて関係者（浜田市；観光交流課、財産管理課、維持管理課、金城支所、島根県立大学、今福線沿線自治会、今福線研究分科会）による会議	参加人数 2名 盆子原、和田
10月11日 10月14日	「下府橋梁」撤去に伴う現地調査 市道改良に伴い下府橋梁（昭和8年建設）を撤去することとなった。 現橋の構造形式や形状寸法、鉄筋配置等の把握とデータとしての保存を目的とした現地調査	参加人数 3名 大畑、服部、和田
11月15日 11月16日	「今福線研究分科会」の現地調査（研修） 現地調査（今福第第一トンネル坑口、河川内の橋脚跡の確認、丸原地区の遺構状態の確認）と「シンポジウム」に関する情報収集及び意見交換	参加人数 12名 村上、桑野、永田、佐々木 小村、伊藤、大畑、渡辺 木村、服部、盆子原、和田
12月1日	「今福線マップ」の活用依頼 ・島根県高速道路推進課より高速道路の利用促進として「今福線マップ」を利用したいとの依頼あり ・「島根ふるさとフェア」（広島市で開催）で、4,000部配布 ・高速道路推進課で「今福線マップ」にICを追記	
12月2日	「第2回実行委員会」の開催 「シンポジウム」の内容、今福線の遺構研究、広報活動、ワークショップ、旅行会社からのバスツアー企画の依頼等について会議	参加人数 2名 盆子原、和田
12月25日	「第3回実行委員会」の事前打合わせ開催 「シンポジウム」までのスケジュールと内容、新聞連載の役割分担ワークショップの開催等の事前会議	参加人数 2名 盆子原、和田

3. 主な活動内容

3.1 浜田市長訪問

訪問日；平成 26 年 2 月 13 日

参加者；佐藤、嘉藤、村上、渡辺、盆子原、和田

「今福線マップ」の作成報告と本研究分科会の活動内容や遺構の維持管理、保存と利活用方法についてPRすることを目的として、久保田浜田市長を訪問した。そこで、浜田市長より下記の提案を頂いた。

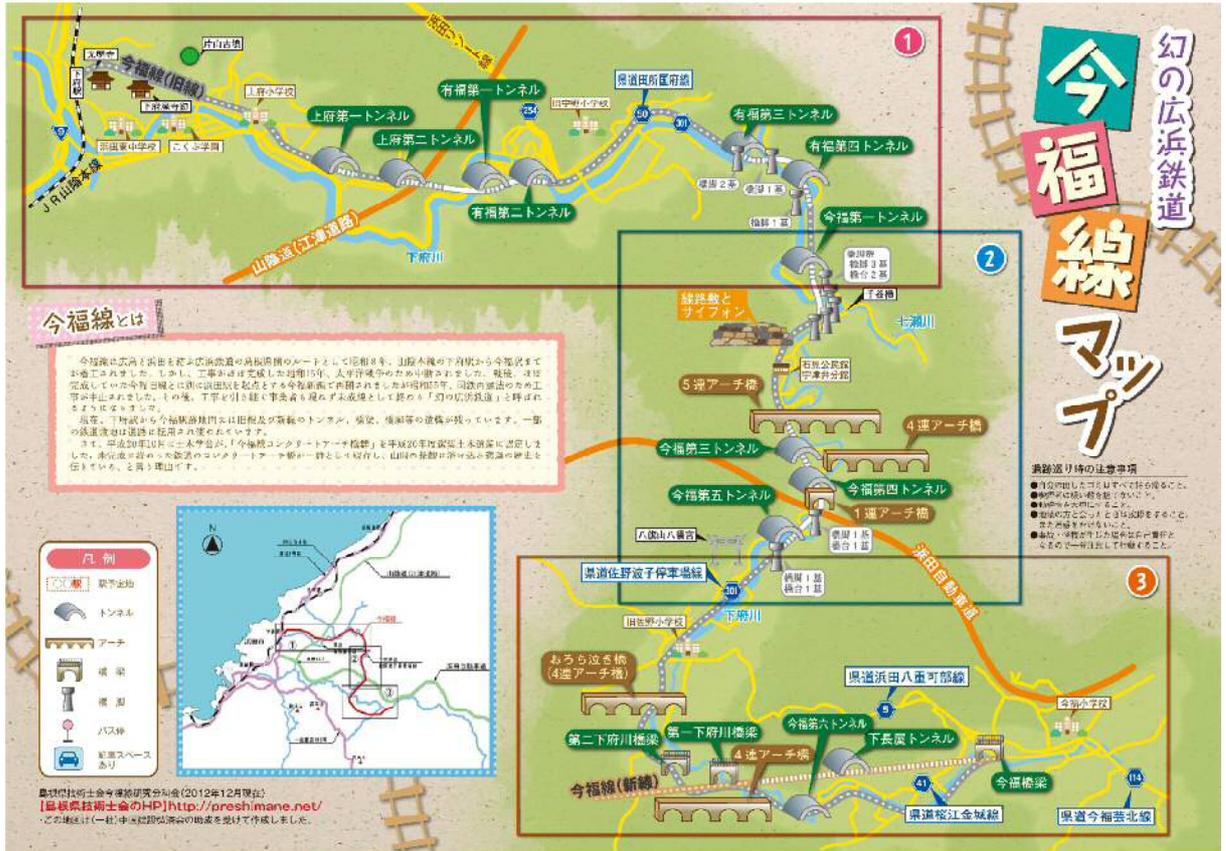


図 3.1.1 完成した今福線マップ

☆久保田浜田市長からの提案

「今福線」を観光資源として売り出したい。誘客や滞在型交流人口の増加を図ることで、外貨を獲得し地域経済の活性化につなげていきたい。

そのために、以下の 2 点について協力依頼を頂いた。

(1) 場所の選定（観光スポットの選定）

- ・どこを観てもらうか。スポット的な場所を選定する。

車での移動（3 時間程度か？）を考慮。

整備をする上でも、財政的な制限もあるため全線は不可能である。そのため、スポット的な場所を選定することで、整備も容易となる。

(2) シンポジウムの開催

・「今福線」は旧線の工事着工（1933年）より約80年経過している。

今福線を売り出す方法として、例えば「今福線着工80年」と銘打って下記の3項目を切り口として「シンポジウム」の開催を行いたい。

①建設経緯の歴史的な背景

基調講演として島根県立大学 総合政策学部 総合政策学科 西藤先生（交通政策論）にお願いしたい。

②土木技術からの観点

③地域資源（観光資源）としての観点

「シンポジウム」は1泊2日として、全国から鉄道ファンを中心に集客を図りたい。また、テレビとも協力して全国的に売り出しを行いたい。
※この、浜田市長への訪問をきっかけとして、本研究分科会の活動は大きな展開へと広がっていくこととなる。

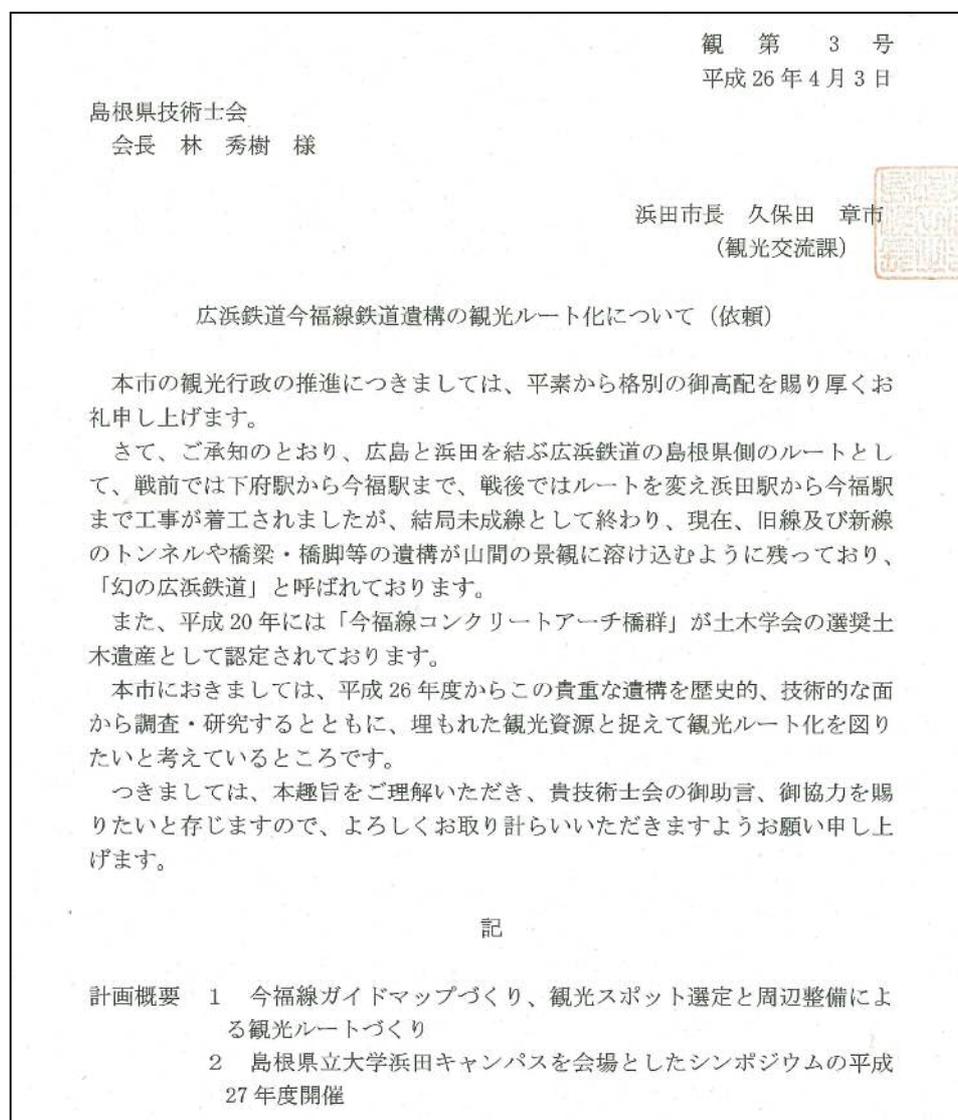


図 3.1.2 浜田市からの協力依頼文

3.2 「中国地方地域づくり等助成事業報告会」での発表

開催日；平成 26 年 6 月 21 日

参加者；嘉藤（発表者）、和田

「一般社団法人 中国建設弘済会」では、地域の交流・連携による一体的で活力ある地域づくりを目的として、平成 15 年度より地域づくり等に取り組む意欲的なボランティア団体等に助成支援を行う、「中国地方地域づくり等助成制度」を創設している。

本研究分科会は一昨年度（平成 24 年度）末、「今福線マップ」の作成を行うにあたり、その制度を活用するものとして、島根県技術士会や研究部会の活動状況・内容及びマップ作成に要する費用等の事業応募書を提出し、見事に採択を受けることができ、僅かばかりではあるがその助成金を基に「今福線マップ」を作成することができた。

「中国地方地域づくり等助成事業報告会」では助成金を受けた団体が各々の活動を発表する場である。平成 25 年度、助成事業として活動した団体等は 28 団体あり、そのうち報告会での発表には 9 団体を選出され、本研究分科会も発表する機会を得ることができた。

報告会では、島根県技術士会の紹介、「今福線マップ」の作成経緯やその苦労話をはじめ本研究分科会の活動内容について発表した。

各団体の発表後、報告会への出席者（全員）及び審査員による投票（審査委員は 1～3 位を 5, 3, 2 点で投票、一般の方々は 1 位のみ投票 1 点）があり、大賞、敢闘賞が選出される。その結果は、発表内容もさることながら、組織票がウェイトを占めるため（今福線関係者は嘉藤さんと私の 2 名しかおりません）、得点の獲得は正直、期待していなかった（発表は良かったですよ！）が、予想に反して 19 票も獲得することができ、全体では 5 番目の順位となった。

報告会後の交流会（懇親会）では、審査委員の方々より、「1 位に入れたよ」などとお仰って頂いた。



図 3.2.1 発表風景



図 3.2.2 発表者・審査員の集合写真

交流会では、国土交通省中国地方整備局の栗田局長、足立企画部長、田中建設部長、吉田企画調整官とお話ができ、今福線を利用した保存や観光化に対して興味を持って頂くとともに、ご意見等も受け賜わることができた。

報告会開会式の栗田局長によるご挨拶の中で、地域の活性化の一つとして大型施設（橋梁、トンネル、ダム、港湾等）の観光化（見学）を考えておられるとのお話があった。

交流会時には、今福線（建設当時の土木技術）を見学した後、現在の新しい技術を見学できるようなルートも考えてもらえると嬉しいなあ というご提案も頂いた。

国土交通省とも何か連携が出来れば、より一層輪が広がっていくのではないかと思われる。

ちなみに、中国建設弘済会の菅原理事長は、ご存知の方もおられると思うが、平成14年～16年の間。島根県土木部長とし島根県に在住され、島根県技術士会にも所属されていた。



図 3.2.3 栗田局長による総評



図 3.2.4 懇親会状況

今福線→

中国地方地域づくり等助成事業報告会 投票	
①ひろしま ひがたの 生きものふれあい事業	正正正正正正正正
②西国街道・海田まち めぐり環境整備事業	正正
③旧国鉄今福線遺構 (土木遺産)のPR活動	正正正正
④石見郡山ウォーキング ミュージアム、竹林整 備と竹の柱づくり	正正正正正正
⑤郷地域の歴史遺産 保存事業	正
⑥イノベーション・リバ ーションによる地域づくり プロジェクト	正
⑦安心・安全な環境で、 街に活気を取り戻そう。 「日蓮はっらい」	正正
⑧花と緑の街づくり 事業	正正正正正
⑨佐木島の地域資源の 活用と息継ぎおもしろし による交流の街づくり事業	正正正正正正正正

図 3.2.5 得点ボード

3.3 下府橋梁（コンクリート製）の現地調査

調査日；平成 26 年 10 月 11 日、14 日

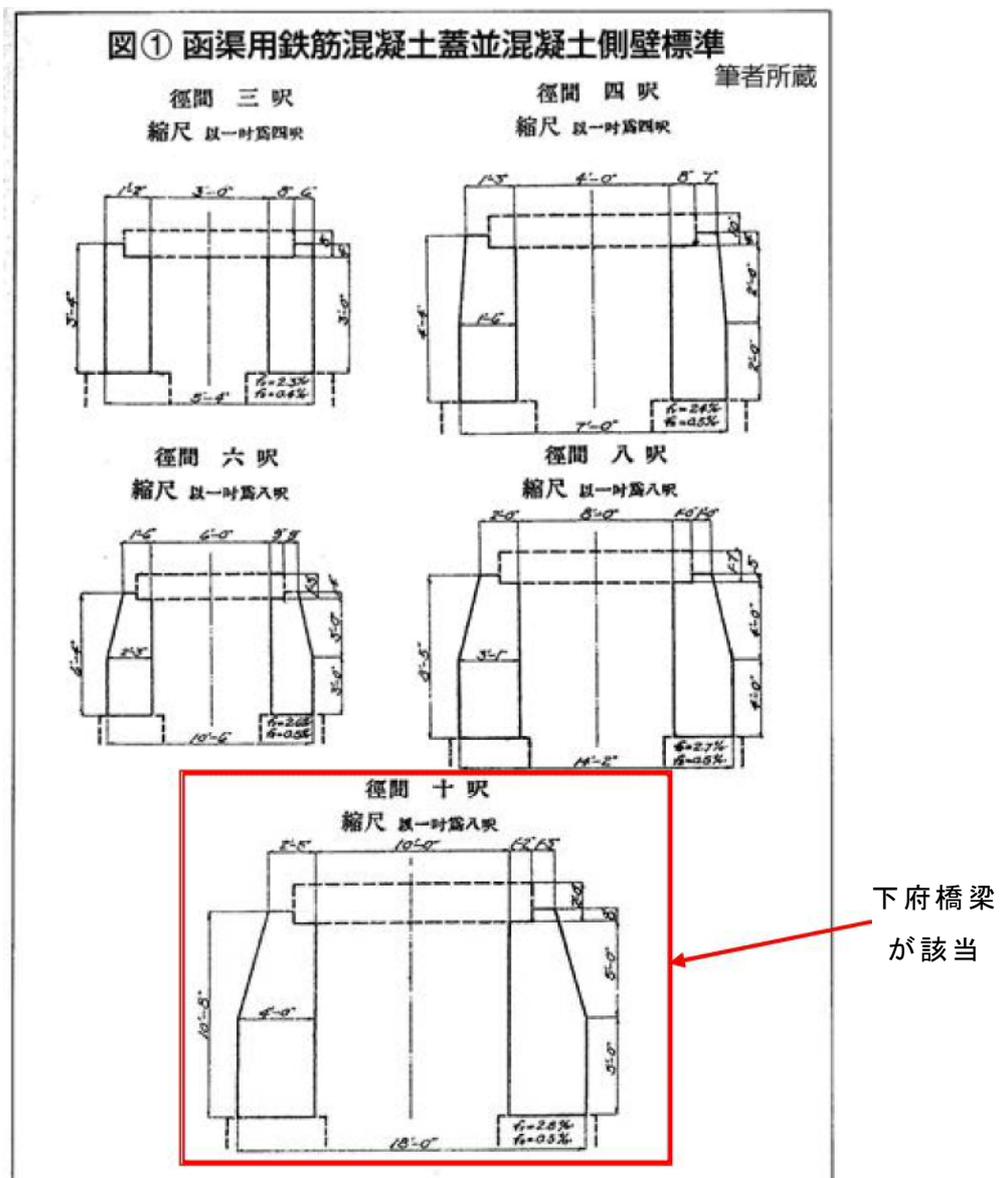
参加者；大畑、服部、和田、佐々木（株ウエスコ）

市道改良に伴い下府橋梁（昭和 8 年建設）が撤去されることとなった。

そのため、昭和 8 年当時の橋梁の構造形式、形状寸法や鉄筋及びコンクリートの状態等を把握するとともに、データとして残すことを目的として現地調査を行った。

（1）調査結果

コンクリートの橋梁として、1916 年（大正 5 年）制定の鉄道基準書として、図 3.3.1 に示す「函渠用鉄筋混凝土蓋並混凝土側壁標準」が制定されている。



「鉄道構造物探見—小野田 滋」より引用
図 3.3.1 1916 年（大正 5 年）制定標準図

①形状寸法図

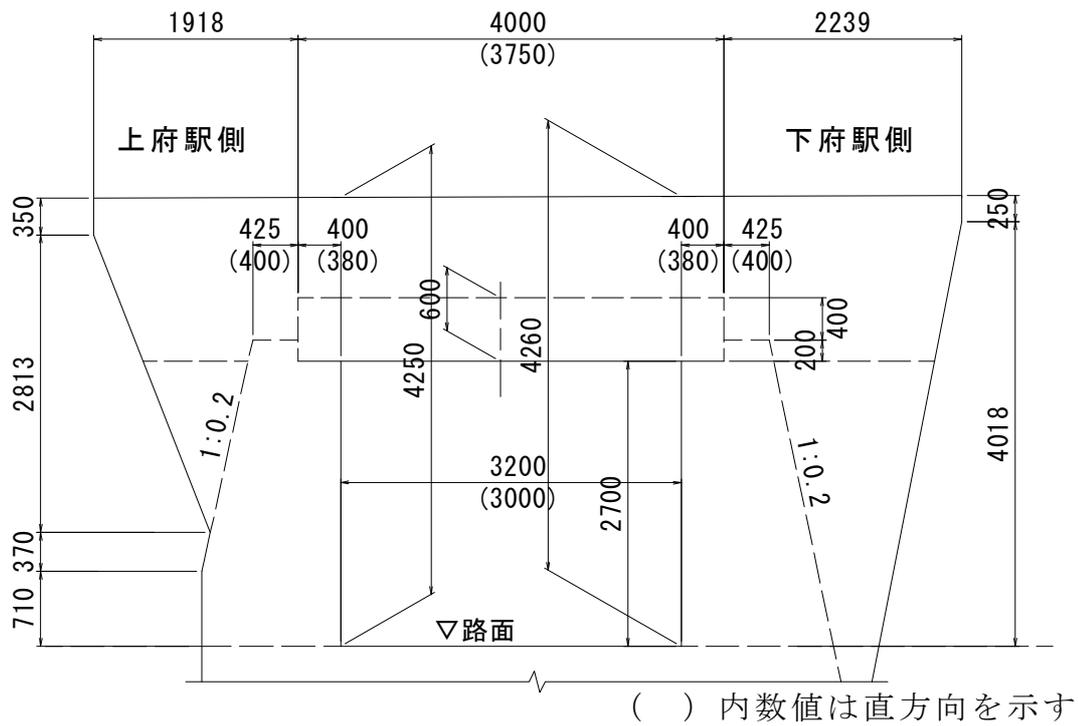


图 3.3.2 側面図

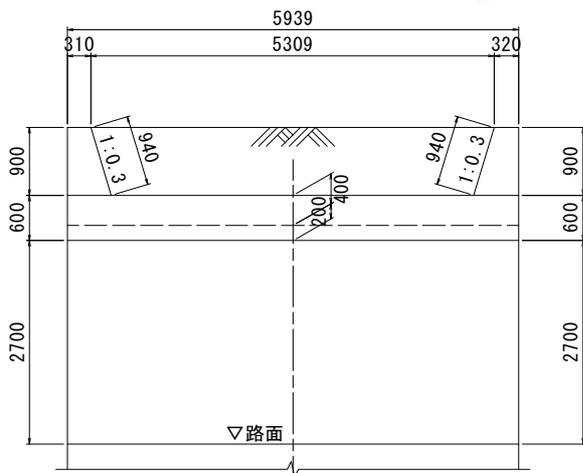


图 3.3.3 断面図(中心)

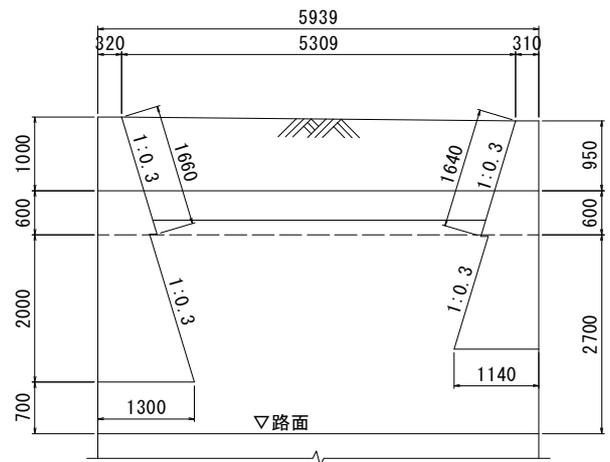


图 3.3.4 断面図(背面)

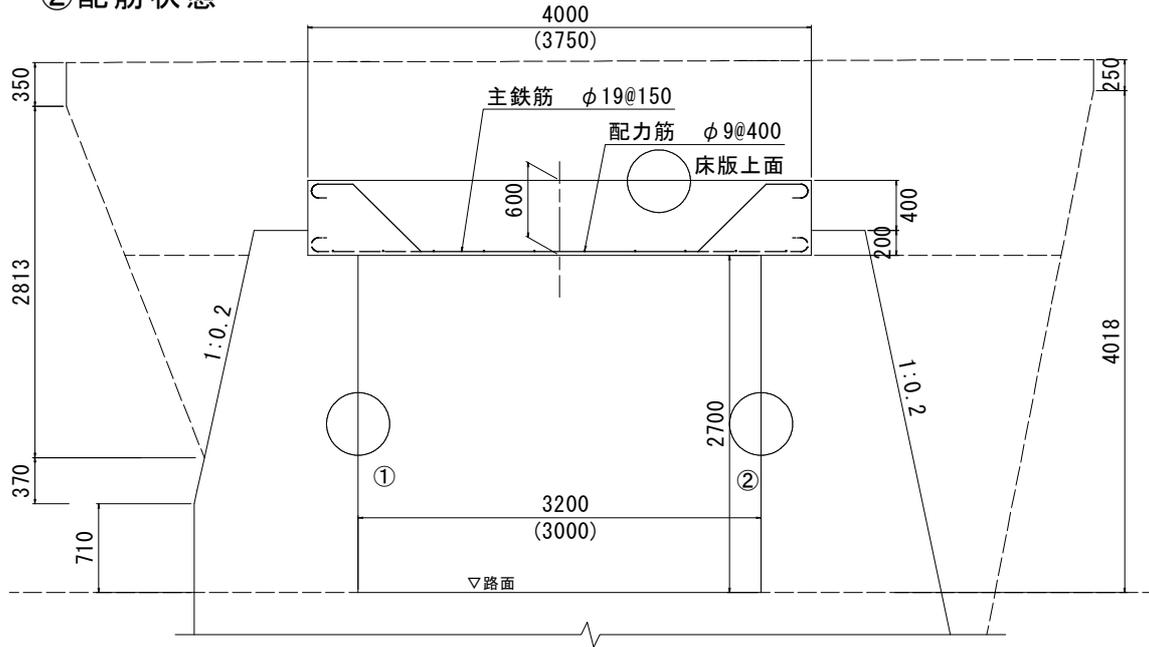


图 3.3.5 側面図



图 3.3.6 断面図(背面)

②配筋状態



() 内数値は直方向を示す

○の箇所（床版上面、橋台堅壁）で、シュミットハンマーによるコンクリートの表面反発強度を測定した。

図 3.3.7 側面図



図 3.3.8 床版断面写真（鉄筋は下面のみ配置）



図 3.3.9 床版内の鉄筋写真（丸鋼）

③調査結果

下府橋梁の構造は、現地調査した結果を表 3.3.1 に示す。

表 3.3.1 調査結果一覧表

		現地計測	標準図
床版厚		0.60m	2 フィート (0.60m)
内空幅		3.00m(直方向)	10 フィート(3.05m)
配筋	下面	橋軸方向 $\phi 19\text{mm}@150$ 、かぶり 50mm 橋軸直角方向 $\phi 9\text{mm}@400$	—
	上面	—	—
反発強度	床版上	$24\text{N}/\text{mm}^2$	—
	豎壁①	$45\text{N}/\text{mm}^2$	—
	豎壁②	$44\text{N}/\text{mm}^2$	—

調査結果より、下府橋梁の構造形式は図 3.3.1 の「函渠用鉄筋混凝土蓋並混凝土側壁標準」における、径間 10 フィートの標準図と同じであることが分かった（図 3.3.1 の標準図の□囲いの断面に該当）。

鉄筋は丸鋼で、上部工である床版部には下面のみ鉄筋が配置された単鉄筋構造となっており、支点付近より曲上げられ端部はフック形状となっている。構造細目は現行基準と同じと思われる。

下部構造である橋台は無筋構造であるが、コンクリートはかなり密実な状態で締め固められているため、シュミットハンマーによる表面反発強度も非常に高い数値を示しており、実際に取り壊しを行った施工業者に確認したところ、現在のものに比べ破碎に要する時間が倍以上を要したとの事であった。

橋梁の背面土はサラサラの砂質土であり、盛土内も同様に砂質土で構築されていることが分かった。



図 3.3.9 コンクリートの状態



図 3.3.10 背面土の状況

3.4 今福線研究分科会の現地調査と意見交換

調査日；平成 26 年 11 月 15 日、16 日

参加者；村上、桑野、永田、佐々木、小村、伊藤、大畑、渡辺、木村
服部、盆子原、和田

今年度は、下記を目的として現地調査を行った。

①見落としした箇所の確認

河川内に残る橋脚柱、今福第 1 トンネル下府駅側坑口の確認他

②「シンポジウム」の開催にあたっての情報収集

実行委員会からの要望事項の確認

③「今福線マップ」の追加・修正箇所の確認・・・実行委員会からの要望

- ・金城 I C（スマートインター）の追加（金城支所長より）
- ・丸原地区を含んだマップの作成（旭支所長より）

現地調査は平成 22 年度より毎年行っており、今年度も実行委員会（島根県立大学・浜田市・自治会）や本研究分科会で何回か現地調査を実施している。調査のたびにいつも新たな発見があり、その都度驚かされている。

（1）見落としした箇所の確認

①河川内に残る橋脚柱（円柱）

今福第 5 トンネルを挟んで下府川を渡河していた橋梁の橋脚跡が河川内にあることが確認できた。現在は、洪水時の流水に支障が生じるため河床付近で撤去されているが、鉄筋（丸鋼）は下図に示すような状態で残置されている。橋脚断面の諸元は概ね下記のものであった。

橋脚径； $\phi 1.60\text{m}$ 、主鉄筋（軸方向鉄筋）； $\phi 22@250\text{mm}$ 、かぶり；200mm
下図の写真の○囲いが橋脚を示す。



図 3.4.1 橋脚跡（下流側）



図 3.4.2 橋脚跡（上流側）

②今福第1トンネル下府駅側坑口の確認

本研究分科会活動の最初の年（平成22年度）に現地調査を行った際、県道より見ることが出来る橋梁群（観光スポット①図3.5.1）より今福第1トンネル内の中に入った。トンネル延長は288mのため反対側坑口の確認が可能と思われたが、トンネル内には茶褐色の湿潤した土砂が側壁部より滲出し路盤にもかなり堆積しており、ぬかるんだ状態であったため、反対側坑口まで行き着くことができなかった。

今年度は、予め森林基本図（図3.4.7）に今福線の線形を記入し、坑口と思われる位置付近より県道から山側へ探索を開始した。開始後ほどなく軌道敷きと思われるコンクリート擁壁を見つけることができた。

『そして遂に坑口を発見！』



図3.4.3 コンクリート擁壁



図3.4.4 今福第1トンネル坑口（下府駅側）

また、新たに分かったことが一つ！

なんとこの区間の今福線は、県道のすぐ横を通っていることが分かった（図3.4.7）。



軌道敷き 床版橋

図3.4.5 県道から見える床版橋



図3.4.6 法面上の軌道敷き

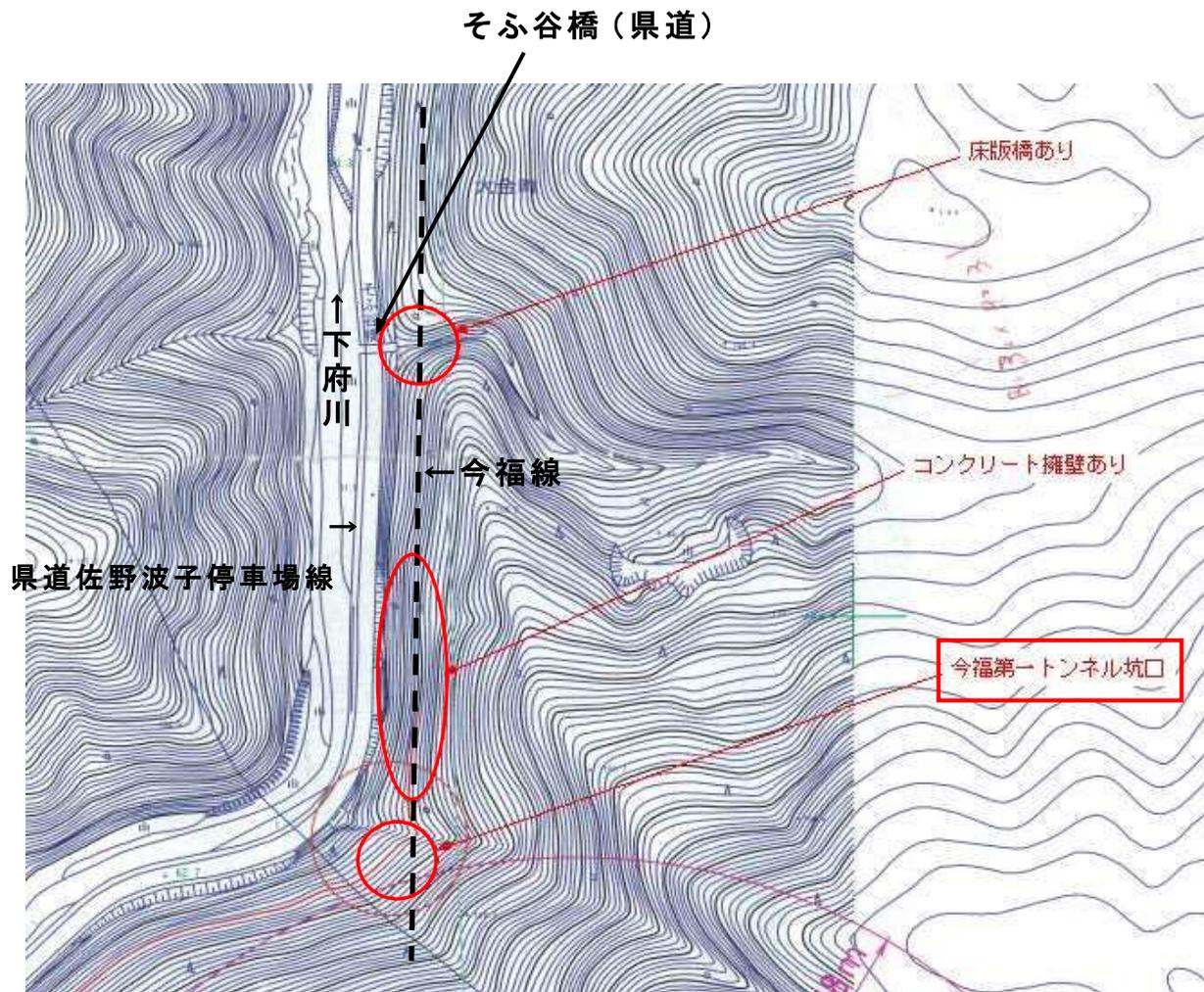


図 3.4.7 県道と今福線の位置関係

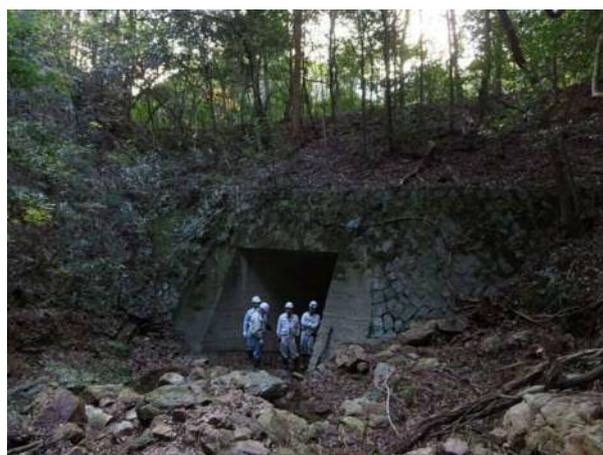


図 3.4.8 床版橋の呑口



図 3.4.9 床版橋の内空状況

床版橋の構造形式は、下府橋梁と同じものと推測される。

3.5 広浜鉄道今福線を活かすシンポジウム実行委員会への参画

平成 27 年 8 月 8、9 日に島根県立大学で開催される「広浜鉄道今福線を活かすシンポジウム」（以下「シンポジウム」とする）に向けて今福線の関係者で 9 月 30 日に実行委員会が立ち上げられた。

本研究分科会は共催として企画立案や運営の参画に携わることとなった。

「シンポジウム」の概要は下記の通りである。

開催日；平成 27 年 8 月 8 日（土）、9 日（日）

開催場所；島根県立大学（浜田キャンパス）・・・講演他

浜田市内（宇津井地区、佐野地区）・・・エクスカージョン

内容；1 日目 講演、懇親会（石見神楽等）

2 日目 エクスカージョン

定員；1 日目 200 名、 2 日目 50 名

参加対象；一般市民、鉄道ファン、鉄道関係者、観光関係者
土木関係者、行政関係者等

テーマ；（仮称）「どう活かす？幻の鉄道遺産」

実行委員会は表 3.5.1 のメンバーで構成されている。

表 3.5.1 実行委員会のメンバー一覧表

広浜鉄道今福線を活かすシンポジウム実行委員会 委員名簿

所属	役職等	氏名	役員等
島根県立大学総合政策学部	講師	西藤 真一	会長
島根県技術士会 今福線研究分科会		和田 浩	副会長
佐野自治会	会長	勝田 二夫	監事
国府地区連合自治会	会長	佐々木 正和	
宇野自治会	会長	佐々木 友春	
宇津井自治会	会長	原田 猛	
佐野自治会	副会長	押上 幸雄	
佐野自治会		石本 恒夫	
雲城まちづくり委員会	会長	川上 幾雄	
今福地区まちづくり推進委員会	会長	田邨 一男	
丸原自治会	会長	岡本 宏	
島根県技術士会 今福線研究分科会		盆子原照晶	
浜田商工会議所 観光部会		鶴田 英也	新任
浜田市金城支所	支所長	吉永 靖司	
浜田市旭支所	支所長	田村 邦麿	
浜田市観光交流課	課長	岡本 好明	事務局長
浜田市観光交流課	係長	岡橋 正人	事務局
浜田市観光交流課	主事	古田 陽平	事務局

（敬称略・順不同）

本研究分科会では、「観光スポット」として遺構を見る上で安全性や停車スペースの有無等を考慮し、図 3.5.1 の 5箇所を抽出した。

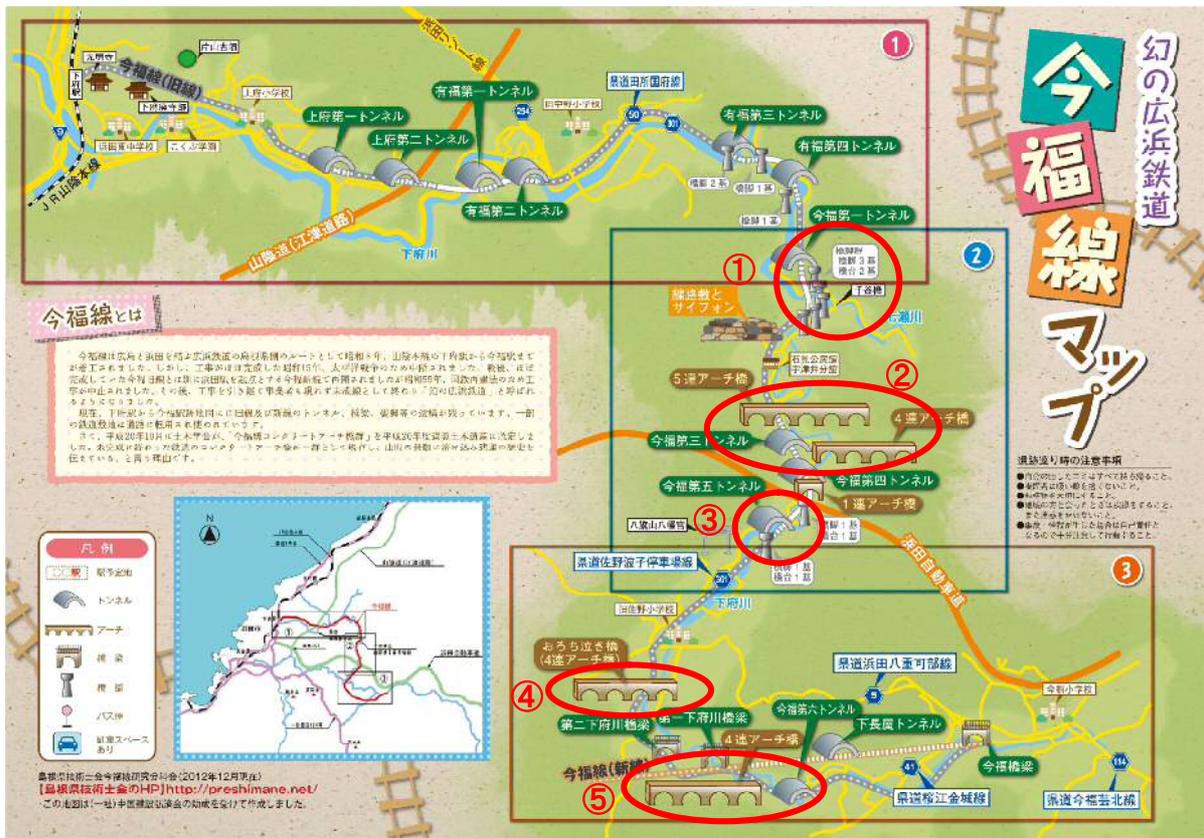


図 3.5.1 観光スポット (○囲い)

実行委員会は、発足までに平成 26 年度の活動経緯表にあるように関係者が度々集まり、遺構の観光化に伴う問題点（安全性の確保や案内方法）やその対策方法について、現地視察や意見交換を行った。

「観光スポット」である見所では、安全対策や案内看板の設置等について、浜田市の維持管理課とも討議を重ね必要な費用を算出し予算の確保に努めた。その結果「シンポジウム」までには、必要最小限の整備は行われる予定となった。実行委員会は 12 月までに 2 回開催され、「シンポジウム」の内容、実施計画、広報活動等について進めているところである。



図 3.5.2 合同現地踏査での集合写真



図 3.5.3 全体会議の様子

また、広報活動としても力を入れており、山陰中央新報や中国新聞でも「幻の広浜鉄道」として取り上げてもらっている。

石見

- 西部本社 TEL0855(22)0109
- 益田総局 TEL0856(22)1800
- 大田支局 TEL0854(84)9065
- 川本支局 TEL0855(72)3010
- 江津支局 TEL0855(52)2347
- 津和野支局 TEL0856(72)1678

かつて浜田と広島を結ぶ鉄道として2度計画され、いずれも未完成に終わった『幻の鉄道路線』をご存じだろうか。1度目は戦争により資材調達が困難となり、工事中止に。2度目は戦後に計画されたが、旧国鉄の赤字路線など財政的な問題から1980年に工事は中止となった。この幻の鉄道路線『広浜鉄道(今福線)』は古いものでは建設後80年近くが経過し、鉄道遺構と

して浜田市内に当時建設された橋脚やトンネルが現存している。同会は会社や業界の垣根を越えて技術向上と親睦を図る団体だ。その中には複数の分科会があり、私は今福線研究分科会に所属している。技術的な

研究以外に、地域資源としての鉄道遺構の活用可能性を探ることも同分科会の目的だ。
今福線研究分科会は鉄道遺構の土木学会選奨土木遺産の認定を契機に2010年に発足したが、それ以前から地元では今福線の遺構を保存、活用する動きがあったそうだ。同分科会で

幻の鉄道で地域おこし

盆子原 照晶さん

(てごねつと石見)



創業支援に関する業務に関わる。2013年度からはJRR江津駅前の活性化事業にも参加。同市在住。

ほんこぼら・てるあき 江津市出身。NPO法人てごねつと石見で、ビジネスプランコンテストなど主に

調査研究を行うと同時に、建設当時の様子や現在の保存活動などを地域の方々から伺い、交流を図ってきた。そして13年、今福線マップを作成。地域の方々の協力があったからこそ完成したマップだ。今年からは浜田市とも協力して、来年夏の今福線シンポジウム開催に向けて動きだしている。

(今回は26日掲載)

図 3.5.4 山陰中央新報 (H26年11月18日) での盆子原さんの紹介記事



見どころはコンクリアーチ橋

「おろち泣き橋」音も楽しく

広島鉄道の遺構で最大の見どころは戦前のルートに7カ所残るコンクリートアーチ橋。「ふるさと歴史紀行の会」の下村明雄代表(59)は、浜田市高田町の一押しは、佐野町の下府川そばにある4連アーチの「おろち泣き橋」(高さ約9.5m、長さ約49m)。川のせせらぎがアーチに反響し、大きく聞こえる場所が橋のたもとに1カ所だけある。「橋の中を水が流れているようで誰もが驚く。音も楽しめることが分かる名称もセンスがいい」

名付け親は、遺構調査で音の変化に気付いた県技術士会会員の和田浩さん(56)。「同市長沢町。アーチを石見神楽の大蛇に見立てた名称を2010年に発案し地元で提案した。和田さんは「音の不思議さを広く知ってもらいたかった。パワースポットとして有名に」と願う。

宇津井町には、いずれも高さ約15層の橋脚3基が残る。「『これに鉄橋が架かるとSLが走っていれば』と見上げるもよし。近くの山のトンネル出口から運転手の気分を眺めるもよし」と下村代表。想像力をかき立てる遺構だ。

図 3.5.5 中国新聞 (H27年1月1日) での記事

4. 今後の活動に向けて

今年度の研究分科会は、「シンポジウム」に向けた活動が中心となった。

平成 27 年度も引き続きその活動が主体となる。平成 27 年 8 月に開催される「シンポジウム」へ向けての活動は、現段階で表 4.1 に示すような活動計画（案）が予定されている。今年度以上に忙しい状況が想定される。

表 4.1 「シンポジウム」までの活動計画（案）

年月日	活動内容	備考
1月～8月	山陰中央新報への連載 広報活動として、2回/月の割合で「今福線」についての歴史、遺構（旧線・新線）、沿線地域の紹介、「シンポジウム」の概要、観光活用や技術士会の活動等についてPR	実行委員会を中心として執筆を行う
1月14日	「合同現地見学会」の開催 浜田市土整備事務所 維持管理課と「おろち泣き橋」周辺の河川沿いにある木の伐採範囲について現地視察	
2月7日	「第3回実行委員会」の開催 ・「わが町自慢大会」の開催（ワークショップ） ・「シンポジウム」の実施計画、広報活動等について会議	
3月～7月	「第4回～第6回実行委員会」の開催 ・「シンポジウム」に向けて定期的に行われる	
4月～	「今福線マップ」のバージョンアップ 丸原地区のマップを追加（「シンポジウム」までに）	
8月8日 8月9日	「シンポジウム」の開催 名称；広浜鉄道今福線を活かすシンポジウム 開催場所；島根県立大学、浜田市内（宇津井地区、佐野地区） 主催；実行委員会、 共催；島根県技術士会 後援；浜田市、島根県、島根県立大学	

本研究分科会や実行委員会の活動は、「シンポジウム」を開催することが目的ではなく、むしろ、「シンポジウム」をきっかけとして「地域の埋もれた資源」を利活用し、それを情報発信することで、地域内外からの交流人口を増やし、地域の活性化につながって行くことが大事なこととなる。

そのためには、「シンポジウム」に携わった人々、特に地域の方々の継続的な活動が必要となってくる。

以下に「シンポジウム」の開催をはじめ、その後の活動を踏まえた提案を行う。

(1) マップの更新（バージョンアップと追加）

「シンポジウム」の実行委員会のメンバーである今福線沿線自治会は、旧線の上府地区、下府地区、宇野地区、宇津井地区、佐野地区、今福地区、雲城地区と新線の丸原地区で構成されている。丸原地区には、橋梁（3橋）とトンネル（2箇所）の遺構が残っており、本研究分科会活動の初年度（平成22年度）に現地視察を行った場所でもある。

現在の「今福線マップ」は、下府駅～石見今福駅までの旧線を主体として作成しているため、丸原地区はマップには入っていない。

実行委員会での会議でも、丸原地区も含めたマップの作成を要望されている。そのため、マップの更新は下記を行うものとする。

①丸原地区のマップ追加

今年度は実行委員会の説明資料として、ゼンリンの地図を基に図4.1のマップを作成している。

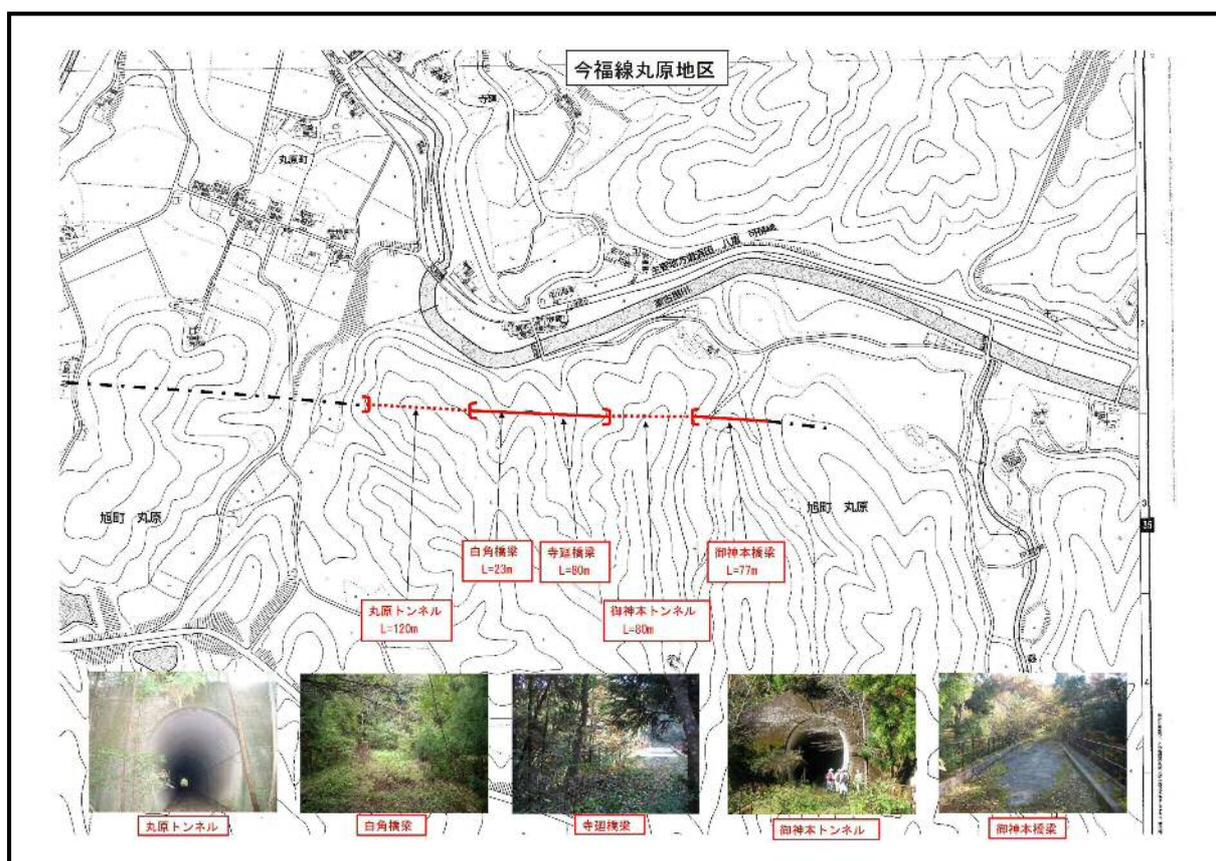


図 4.1 丸原地区マップの素案

上図を基に遺構のコメント等を追加し、他のマップ同様に仕上げていく予定である。

また、「今福線マップ」全体版の位置図にも、図4.2に示すように丸原地区を追加する。



丸原地区追加

図 4.2 今福線マップ全体版への追加

②写真やコメントの更新

現在は、平成 24 年以前の写真が使用されており、古いものでは平成 22 年時の写真もある。活動を開始してわずか 5 年であるが、トンネル坑口の目印となる小屋が撤去されたり、図 4.3 に示すように下府橋梁のように遺構そのものが市道改良のため取り壊されてしまったものもある。



平成 24 年度



平成 26 年度

図 4.3 下府橋梁の状況

③観光ルートや遺構の技術的な特徴の追記

遺構の見所やポイント、あるいは技術的な特徴を記載することで、見に来られる方々（特に一般の方々）に興味を持ってもらい、リピーターとして何度も足を運んでもらえればと思う。

(2) シンポジウムでの講演や広報活動

シンポジウムでの講演

「シンポジウム」では、遺構について土木技術的な観点より講演者として発表することとなる。今福線の橋梁やトンネルの遺構そのものには特別珍しい形式があるという訳ではないが、旧線（昭和8年）・新線（昭和44年）の建設時の標準図等を紐解きながら、下記事項について技術者として一般の方々に分かり易く伝えることができればと考えている。

①鉄道構造物の技術面からの資料整理

技術や基準の変遷による下記の相違について整理する。

材 料； i 木材、 ii 石材、 iii 煉瓦、 iv コンクリート、 v 鉄、 vi 土工
工 法； トンネル施工法（山岳工法、開削工法、シールド工法）
構造形式； 橋梁（アーチ橋、桁橋、トラス橋）

②今福線に見られる技術 → アピールできるものの有無

建設年次（旧線；1933年～1940年、新線；1968年～1980年）や施工箇所（橋梁、トンネル）での構造形式の相違・工夫や技術的な特徴（施工方法がわかればなお良い）を調査する。

建設年次；旧線では資材調達が厳しい状況、新線では財政が厳しい状況の中での技術

施工箇所；架橋地点や設置箇所の地形（河川・溪谷）や地質の状況に応じた技術

③遺構の状態（構造物の健全性）

トンネル内のひび割れや漏水に見られる劣化の状態、あるいは、橋梁防護柵の腐食に見られる健全性等を整理し、今後、遺構を安全に利活用して行く上での基礎資料とする。

④見所の抽出 → アピールできるものの有無

（公社）土木学会よりコンクリートアーチ橋群が、2008年に選奨土木遺産に認定された（島根県では2番目）。

上述した中で今福線に見られる技術でアピールできるものや、旧線と新線が交差し両方が見られる箇所(全国的にも珍しい)等の見所の抽出。

⑤今後の利活用(保存)方法 → 地域自治会の方々の理解と協力が必要!

利活用することが保存・維持していく事につながると考え、それを念頭に多岐に亘った提案を行う。

【事例】廃線トンネルの事例として、全国的に見るとハムやソーセージの熟成庫として利用されている例がある。電気代が節約でき味の面でも「トンネル熟成」として評価を得ている。また、食品貯蔵庫としての研究も始められている。

広報活動

広報活動では、一般の方々へ「今福線」の存在、そして「シンポジウム」の開催を周知してもらうことを目的として、平成27年1月より山陰中央新報において「今福線」の連載記事が始まることとなった。

2回/月の割合(合計17回を予定)で「今福線」の歴史、遺構(旧線・新線)、沿線地域の紹介、「シンポジウム」の概要、観光としての魅力や技術士会の活動等について、実行委員会のメンバーが主体となり、本研究分科会も7回程度記事を書く予定となっている。

どんな連載となるか、皆さんにも楽しんで読んでもらえればと思います。

(3) 地域の方々や関連機関との連携

「今福線マップ」の作成や「シンポジウム」の開催にあたり、実行委員会での西藤先生(島根県立大学)、浜田市、今福線沿線の自治会、島根県、浜田市商工会議所など、関連機関の連携が非常に重要となる。

しかし、現段階では自治会によっては温度差があり、全地区が諸手を挙げて歓迎・協力とまでには至っていない。そのため、本研究分科会がクッション材や潤滑剤としての役割を担って行ければと思う。

5. おわりに

「今福線」旧線の起点は下府駅でそのルートは村と村とを結んだ計画となっています。これは、当時の鉄道が人を運ぶことを目的としていたためです。

「今福線」は戦前、戦後の2度に亘り工事が行われ、いずれも道半ばで工事中止となり、結果として「幻の鉄道」となってしまいました。

しかし、工事着工から約80年経った現在、「シンポジウム」をきっかけとして、鉄道建設の目的であった、人と人、地域と地域がつながろうとしています。

今福線研究分科会も、その輪の中に加わり地域貢献の一助となればと思います。

以上